二十六聖人記念館（1）
～長崎巡礼④～

左手前が記念館、２本の塔がある記念聖堂

一五九七年、長崎で二十六人のキリシタンが豊臣秀吉の命令によって処刑された。この事件は「日本初の大殉教」としてヨーロッパでもよく知られている。

一八六二年、（二十六人は教皇ピオ九世によって列聖された。（聖人とは殉教者や信仰・愛徳が特にすぐれた者を教皇が列聖する）

一九六二年に日本二十六聖人列聖百年祭が行われ、殉教地・長崎の西坂に記念碑と記念館が建てられた。その初代館長に就任したのはスペイン人のディエゴ・バチェコ神父である。

彼は四十二年間、館長を勤めたが、在任中の一九七八年に日本に帰化し、日本名はディエゴ結城了悟。二十六聖人ではないが、殉教者のディエゴ結城了雪に由来する。

「ディエゴ」はクリスチャン・ネームで、洗礼を受ける際、教会の聖人たちの名前をつけてその保護を願う。

ディエゴ結城了雪は一五七四年に徳島県に生まれ、イエズス会に二十二歳の時、入会した。しかし一六一四年、徳川家康の禁教令で高山右近らとマニラに追放され、マニラで司祭に叙階された。

その後、ひそかに長崎に戻って日本各地の信徒を励まし、活動したが、一六三六年に捕えられ、穴吊りの刑で殉教した。享年六十二歳。

彼の伝記の最後に「自分のために何一つ残さず、すべてを返した。その一途な生涯は神にとらえられた人のしるしとなった」とある。信仰の力の神秘としかいいようがない。

そのディエゴ結城了雪の名を帰化名にしたディエゴ結城了悟神父は希望して来日したわけではなく、また日本の殉教者について詳しくもなかった。

しかし二十六聖人記念館の館長になってから日本の殉教者の調査・研究を始めた。そして二〇〇八年十一月、長崎で列福した百八十八人の資料づくりは彼がその中心となった。

列福式の前年に神父に会った時、資料室の棚から分厚い赤い表紙のバチカンへの列福資料を見せてもらった。その提出資料を作るための膨大な資料も。

ふと、ある神父が言った、もし結城神父がいなかったら日本の百八十八人の列福は実現しなかったかもしれないという言葉を思い出した。

結城神父に初めて会った時、日本の偉大な殉教者を調べるために自らの意志で来たという返事を期待して来日の動機を尋ねた。ところが結城神父は「私は南米コロンビアの首都ボゴタで司祭になり、来日は自分の意志ではなく、神の思し召しです」といわれた。

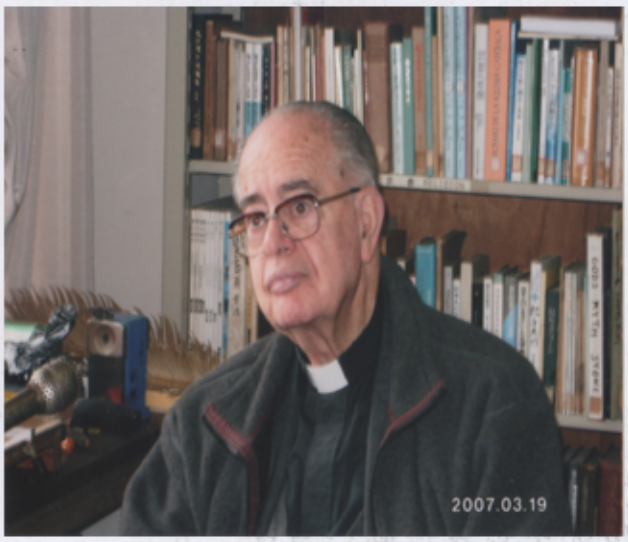
その神父が日本の殉教者のスペシャリストになり、そのうえ殉教者の名前をとってディエゴ結城了悟で日本に帰化するとは、それこそ神の思し召しだろう。

人は神からの言葉を聞き取ると同時に、その言葉に忠実に生きる時、人生が大きく変わる。百八十八人の列福式の一週間前、結城了悟神父は了雪同様、自分のためには何一つ残さず、静かに帰天された。

記念館を訪れる際には、ぜひ、ディエゴ結城了悟神父のことを思い出してほしい。

◇　◇

「神への無私の愛と隣人への愛で、自分の生活をつくりかえるよう私たちに刺激を与えています」（教皇ヨハネ・パウロ二世＝二十六聖人殉教地で）



故ディエゴ結城了悟神父